の影の思想と新プラトン主義」、『ルネサンスの知の饗宴――ヒューマニズムとプラトン主義――』、佐藤三夫編、東信堂、一九九四年、八九―一〇二頁参照。

(9) Giordano Bruno, *De la causa, principio et uno*, a cura di G. Aquilecchia, Torino; Einaudi, 1973.

(10) 拙論「ジョルダーノ・ブルーノとクザーヌス――『原因・原理・一者について――』における神と宇宙の関係を巡って」、五一―六七頁参照。

(11) 拙論「ジョルダーノブルーノのカオス論」、平成一一～一四年度科学研究費補助金（基盤研究(B)(1)）研究成果報告書『プラトン主義の伝統における継承と変容』（研究代表者　小浜善信）九一―九八頁参照。

(12) John Charles Nelson, *Renaissance Theory of Love*, New York: Columbia University Press, 1958

(13) *Des Fureurs Héroïques*, Paris: Les Belles Lettres, 1999

(14) なお、『英雄的狂気』における新プラトン主義の影響に関して、近年、以下の論文が刊行された。Angelika Boenker-Vallon, "Unità nascosta e autoconoscenza. La presenza della tradizione del neoplatonismo cristiano negli Eroici Furori", *Bruniana & Campanelliana*, 2003/2, pp. 281-293. この論文は、エリウゲナのテオファニアの思想とブルーノの自然観など、エリウゲナとブルーノを大きく分けて三つの点で比較し、両者の類似点を強調している。もっとも、著者自身指摘しているように、ブルーノによるエリウゲナの言及はラテン語著作にひとつあるのみである。したがって、論文のタイトルにある presenza がどこまで確定可能な影響なのかは疑問が残る。

(15) テキストは、ジョヴァンニ・アクイレッキアによる校訂版 *Des Fureurs Héroïques*, Paris: Les Belles Lettres, 1999 による。

(16) 翻訳は、ジョルダーノ・ブルーノ『英雄的狂気』、加藤守通訳、東信堂、二〇〇六年による。

(17) 巻（ローマ数字）および頁は、フリードリッヒ・クロイツァー（Friedrich Creuzer）版のプロティノス全集による。そこには、ギリシャ語原典とともにフィチーノのラテン語訳および註解が掲載されている。

Plotini Opera omnia Porphyrii liber de vita Plotini cum Marsilii Ficini commentariis et ejusdem interpretatione castigata / annotationem in unum librum Plotini et in Porphyrium addidit Daniel Wyttebach ; apparatum criticum disposuit, indices concinnavit G.H. Moser, ad fidem codicum mss. et in novae recensionis modum Graeca Latinaque emendavit ...adjecit Fridericus Creuzer, Oxford : E. Typogrpheo Academico, 1835, 3 v.

(18) 『エネアデス』の訳は中央公論社『プロティノス全集』、一九八六・七年を参照したが、フィチーノ訳を反映させるためにかなりの変更を加えた。

(19) *Des Fureurs Héroïques*, p. 508.

(20) *Des Fureurs Héroïques*, p. 510.

(21) 根占献一・伊藤博明・伊藤和行・加藤守通『イタリア・ルネサンスの霊魂論』、三元社、一九九五年、一八一―一三九頁参照。

(22) 前掲箇所参照。

【シンポジウム】

イタリア・ルネサンスにおけるプラトン哲学とキリスト教神学

根占　献一

（一）序――フィチーノ研究略史

二〇世紀前半から今日に至るまでの間に、イタリア・ルネサンスのプラトン主義者マルシリオ・フィチーノ Marsilio Ficino（一四三三―一四九九）の研究状況は大きく変わった。その先駆けをなした一論文は以下のようなものである。当時のドイツ、ミュンヘン大学私講師のマティアス・マイエル Matthias Meier が「マルシリオ・フィチーノにおける神と精神[1]」という論文を書き、フィチーノの認識論を扱ったのは、一九一七年であった。この論文はヨーゼフ・シュレヒト Joseph Schlecht 還暦論集に収められているのだが、他に寄稿した研究者として、クレメンス・ボイムカー Clemens Baeumker、マルティン・グラープマン Martin Grabmann らの著名人を見出すことができる。マイエルはこれより先、一九一四年に『デカルトとルネサンス[2]』という研究書を発表し、ルネサンス・プラトン主義のデカルトへの影響を明らかにしていた。この書はボイムカーに献呈されていた。当該論文では、哲学史上の歴史的人物としてフィチーノは既知の人物に属するものの、専門論文ではまだ余り評価されていない、と述べたのであった。

この頃のドイツの学問世界では、フィチーノの一大主著『三重の生』（*De triplici vita*）に基づく、精神（知的）労働の健康法が研究されていた。これは、この国における同著書の影響が歴史的に大きかったことにもよるが、占星術に関わる記述も多く、この方面でも注目されていた。日本では近年、こちらの類いの研究が、魔術（D. P. Walker のスピリット研究）や芸術（メランコリーに関わる Erwin Panofsky などの図像研究）に関心ある読者の興味を引いてきた。私見では、この日本的関心はやや偏りがあるように見受けられる。なぜなら、主体的となるべきフィチーノらの哲学思想の究明が、常に副次的にして部分的な段階に留まっている感が否めないからである。

マイエル論文は、当時のドイツにおける、やや限定された研究状況のなかで、一九一一年に出た、エルンスト・カッシーラー Ernst Cassirer の『近代の哲学と科学における認識問題』（*Das Erkenntnisproblem in der Philosophie und Wissenschaft der neueren Zeit*, Berlin）により、フィチーノが哲学者としても評価

され出した、と述べている。確かに、カッシーラー以後、イタリアの学者たち、ジョヴァンニ・ジェンティーレ Giovanni Gentile、ジュゼッペ・サイッタ Giuseppe Saitta、ジュゼッペ・アニキーニ Giuseppe Anichini、ジョヴァンニ・ディ・ナポリ Giovanni Di Napoli、イタリア以外では、ポーランド出身で学術誌『新スコラ哲学誌』(*Rivista di filosofia neo-scolastica*) に論考を発表したマルヤン・ハイツマン Marjan Heitzman、若い頃はイタリアにいた、ベルリン出身のパウル・オスカー・クリステラー Paul Oskar Kristeller らの専門研究により、フィチーノ解釈は大きな進展を遂げて、現在に至った。

(二) フィチーノとフランチェスコ・ダ・ディアッチェートの愛の伝統

このような研究上の発展が、今日の私のこの提題に充分に反映されうるかどうかは自信があるわけではない。最初、このシンポジウムの企画を加藤守通氏からいただいた時、私が考えていたのは、フィチーノの『愛について』(*De amore*) の系譜を辿ることであった。その視点から、「一五・六世紀のプラトン主義――フィチーノと彼以後の世代の哲学者――」という題は提出された。

これは、インターネット時代に入り、フィチーノの最も重要な弟子であったフランチェスコ・ディ・ザノビ・カッタニ・ダ・ディアッチェート Francesco di Zanobi Cattani da Diacceto（一四六六―一五二二）の、師の作品と同題名の『愛について』(*De amore libri tres*) などが容易にアプローチできるようになったことがあったし、また、待望のジョルダーノ・ブルーノの翻訳、『英雄的狂気』(*Eroici furori*) がいつもながら加藤訳（東信堂、二〇〇六年）で出たこともあり、いいタイミングに思われたからであった。『英雄的狂気』には、清新体派詩の詠う高貴な心にペトラルキズモに見られる愛の冷たき炎がともされた文学的伝統と、フィチーノやディアッチェートのプラトン的愛の哲学的伝統とが流入し、混交し合っている。ここでは、詩人と、神的な至上の対象を英雄的に憧憬する哲学者とはひとりの人に集約され、異なってはいない。ブルーニはまさしく詩人哲学者である。

ディアッチェートの代表的著作のうち、『美について』(*De pulchro libri III*) は現代の校訂版[3]があり、読むのは容易だったが、『愛について』は一六世紀の版しかなく、なかなか見ることさえ困難であった。ディアチェートの両作品とも、存在の位階論においてきわめてプロティノス的であるので、新プラトン主義の名を冠するこの協会で発表するには相応しい、と考えてもいた。その『愛について』のなかで、ディアッチェートが、プロティノスやその他のプラトン主義者は、キリスト教の神 (Iddio) が本質あるいは知性であることを否定し、まったく単に一なるもので充溢、満ちている、といっているのは興味深い。また、神は自らにしか知られず、彼の神性の底知れぬ深みの礼讃者、崇拝者である、と断じ、ディオニュシオス・アレオパギテスがこの神的な濃霧 (caligine) を祝している、とも書いている。

なお、『愛について』はフィチーノと同様、自ら俗語訳を行なっている。ルネサンス時代には、実にさまざまな「愛の著者たち」(trattatisti d'amore) が現われて、「愛」の考察を展開した。ブルーノの前記作品もそのひとつであり、フィチーノとディアッチェートの師弟は、わけても重要な著述を残して、これらの著者たちに素材を提供した思想家といえるであろう。彼らのプラトン的伝統は特にペトラルカの詩的伝統と融合する。この影響は大きく、フランスやイベリア半島の国々、海を越えて英国など、広範な拡がりを見せた。一例を挙げると、加藤美雄の研究（『モーリス・セーヴ研究』昭森社、一九六四年）と訳業（モーリス・セーヴ『デリ――至高の徳の対象――』青山社、一九九〇年）から知られる、一六世紀フランス文学におけるモーリス・セーヴ Maurice Scève（一五〇一―一五六四）がいる。セーヴはリヨン出身で、当地はイタリア・ルネサンス文化の重要な流入地であった。

(三) 公会議と霊魂不滅論

ここではしかし、愛の問題、またその発展史を辿らずに、私自身が関心を持ち続けている題目に話を転じることにしたい。それは「霊魂不滅」の問題である。このプラトン主義的テーマは、私たちの先祖が初めてキリスト教を受け入れた時――一六世紀後半のことであるが、この思想をも知ることになったという意味で、たいへんに重要だと考えるに至った。来日したイエズス会を中心とする宣教師たちは、仏教、特に禅宗がキリスト教と違って、死ねば終わり、霊魂は死すべき、と説いていると、盛んに批判した。彼らが霊魂不死を強調した背景には、後述するラテラノ公会議でこれが決められたことが大きかったであろう。

一五八三年に来日し、九〇年にはイエズス会日本準管区長となった、ペドロ・ゴーメス Pedro Gómez の『講義要綱（コンペンディウム）』(*Breve compendium*) ――アリストテレス『霊魂論』の註釈とカトリック教義の解説――日本語本では、ラテン語本と違い、霊魂不死の特別な頁があり、これをコッレージョで講義することがいかに大切な意味を有していたが、よくわかる。[1] ちなみに、この『講義要綱（コンペンディウム）』のラテン語本は現在ヴァティカン図書館にあるが、かつてはスウェーデンのクリスティーナ女王が所有していた。また、日本語本はかれこれ一〇年ほど前の一九九五年に、オックスフォード大学モードリン・カレッジ付属図書館で発見された。

その同じ年に、私は編訳著としての『ルネサンスの霊魂論』（一九九五年、三元社）を公にし、「フィチーノの『プラトン神学』と霊魂不滅の伝統――特に「自然的欲求」をめぐって――」を著わした。この時には、私のなかでは「霊魂不滅」は彼我の相違を越えた普遍的問題、と必ずしも明瞭には意識されていなかった。この小論で、中世思想とルネサンス思想の問題を対比させる意味で、ふたつの公会議に言及した。それは、一三一一―一二年開催のヴィエンヌ (Vienne) と一五一二―一七年開催の第五回ラテラノ (Lateranо) の公会議で、一方には中世のアリストテレス主義の影響が、他方にはルネサンスのプラトン主義のそれがそれぞれ、如実に表現されていると指摘した。ただ、そこでは公会議の中身までは踏み込んで書いていないので、今回はすこし細かくその内容を見てみたい。

一四世紀初めのヴィエンヌの教令 (decreta) には以下のようにある。「理性的あるいは知的霊魂の実体が、それ自身でおよび本質的に人間の身体の形相でないと無謀に主張するか、

あるいは疑わしいと見なす、すべての教説あるいは命題は、誤りであり、かつカトリック信仰の真理に反するとして拒否する[6]」、と。これは当時にあって、フランチェスコ修道会厳格主義者（spirituale）、ヨハンネス・ペトルス・オリヴィ Johannes Petrus Olivi（一二九八年死去）の説に従う者たちの思想を否定したのであった。ここには、霊魂は肉体の形相である、というアリストテレス主義が反映されている。一三世紀に、同主義が西欧世界を席巻し、大学で大きな権威を持った結果であった。質料としての身体、形相としての霊魂などという考え方が、聖書的・キリスト教的伝統にはとても見出されない概念であることは言うまでもない。

この二〇〇年後の、一六世紀初めのラテラノの教書（constitutio）ではこうである。「信徒たちによって常に峻拒されてきた、特に理性的霊魂（anima rationalis）の本性、それが死すべきものである、あるいはすべての人間にそれが唯一であるという、きわめて有害な誤り、毒麦を主の耕地に蒔く者があり、（そのなかの）ある者は哲学者気取りで、この命題は哲学に従えば、真理であると見なしている」、と。[7] ここには、イスラムの哲学者アヴェロエスの説と所謂二重真理説が示唆されている。

これに対し、続けてラテラノ教書は、ヴィエンヌの普遍公会議と、時のローマ教皇クレメンス五世の名を挙げながら、言う。「同会議で宣言された規定（canon）では、知性的霊魂（anima intellectiva）は、まことにそれ自身でおよび本質的に（vere per se et essentialiter）人間の身体の形相として存在するだけでなく、不滅である。さらに、数多の数の身体にそれがひとつずつ（singularitER）注入されて、それは多数化され、またそうされるべきなのである。これが明確に福音から確定されるのは、主が〈かれらは霊魂を殺すことはできない〉［マタイオス一〇章二八節］、また別のところで〈この世で自らの霊魂（anima）を憎む者は永遠の生（vita）ではこれを保つ〉［ヨハンネス一二章二五節。共同訳では〈この世で自分の命を顧みない人は、それを保って永遠の生命に至る〉］と言われるときである。また、永遠の褒賞、そして永遠の罰を生の価値に応じて判断すると、主が約束されるときなのである［マタイオス二五章四六節］。そうでなければ、化肉とキリスト教の他の奥義がわれわれにはなんのためにもならず、復活は期待されえないこととなり、かつ、聖人と義人は「使徒（註。大文字。パウロを指す）に従って」、あらゆる人間のうちこれ以上の惨めな者はいない［コリントの信徒への手紙Ⅰ一五章一九節］ということになるだろう」、と。[7]

引用には名指しされていないものの、パドヴァなど、北イタリアの大学で教えたアリストテレス主義者、ピエトロ・ポンポナッツィ Pietro Pomponazzi（一四六二―一五二五）と彼の思想が批判され、否定されていると見ることができるであろう。このポンポナッツィの学的活動を知るには、先ずパリ大学とは異なる当地の大学の実態を知っておく必要がある。ここでは、学芸学部が目的の異なる神学部に抗して、哲学の権利を主張する必要はなかった。パドヴァを始め、ボローニャ、マントヴァ、フェッラーラ――彼が教えた諸大学であった――などは法律と学芸だけの学部で、独立した神学部は存在していなかった。[8] このため哲学は宗教のことを顧慮することなく、純粋に理性に基づく哲学的議論が可能だった。霊魂不滅の問題も、彼はアリストテレス思想を究めることで、信仰から切り離された同哲学の霊魂観を語ることができたのである。

さて、先の「霊魂は肉体の形相である」という表現と同様、聖書的・キリスト教的伝統には見出し難い「霊魂自体の不死」は、ルネサンス期に高まったこの可否をめぐる議論と無関係ではない、つまりフィチーノの『プラトン神学――霊魂不滅論――』（*Theologia platonica de immortalitate animorum*）に見られるような、その強調の風潮と大いに関連があると見るべきであろう。この時代、霊魂不滅の書が数多く書かれたことは、ディ・ナポリが大著で詳細に研究しているところである。[9] 霊魂不滅論の流行が一六世紀初めに教会に影響を及ぼし、霊魂不滅が信仰箇条になったことは、イタリア・ルネサンスにおけるプラトン主義復興の反映の結果と言えるであろう。霊魂不滅論のスンマというべき『プラトン神学』の第一五巻は、「不敬虔な」アヴェロエスに対する批判となっている。

（四）プレトンからフィチーノを経てステウコへ
――「古代神学」から「永遠の哲学」へ

ルネサンスにおけるプラトン主義復興の外的きっかけは、ラテン教会とギリシャ教会との合同を目指すフィレンツェ公会議にギリシャ人の一行がやって来たことにある。一四三八―三九年のことで、その一員のなかにプレトンの異名を有するゲオルギオス・ゲミストスがいた。プラトンの響きに似ていることから、彼は好んでそのように名乗った。短期の滞在中にプレトンは、イタリアにいる「プラトン主義者たちのために」『プラトンとアリストテレスの哲学の相違』（*De platonicae et aristoteticae philosophiae differentia*）を著わし、ラテン人がアリストテレスを誤読して、間違った理解をしているのであり、キリスト教会とアリストテレスの思想が反していることの数々を指摘した。そのなかに、アリストテレスは人間の霊魂は不死であるとは教えていない、というものもあった。また、アヴェロエスによって、このギリシャ哲学者の著作は人間の叡智全体を包括すると信じ込ませている、というものでもあった。特に、アリストテレスの著作が自然哲学を完璧に完成させている、という確信性において、アヴェロエスは間違いを犯していると主張した。[10]

本書の詳細な内容に立ち入らずに、ここでは、プレトン思想と区別されるフィチーノ思想の特色に触れておきたい。プレトンが提示した、プラトン＝アリストテレス間の相違というよりもむしろ優劣をめぐる議論には、イタリア半島のヒューマニストはこの段階では積極的な関心を示してはいない。それは来伊したギリシャ人哲学者の間で盛んな論題となった。そのなかにあって、のちにローマ教会の枢機卿になり、重要な蔵書をヴェネツィアの図書館に遺贈したベッサリオンは両哲学者のそれぞれの特長を認め、双方に価値を置いた。この考え方に、後の世代に属するフィチーノは与し、プレトンのように一方的にアリストテレスを否定することはなかった。その上で、プレトンとフィチーノの最大の違いは、人間の行動に自由を認めるかどうかに懸かっていると、と言えるであろう。プレトンは『運命論』（ペリ・ヘイマルメネース）では、宿命論・決定論を展開して自由を否定した。

フィチーノは『プロティノス註釈』(*Epitoma Plotini*) の、プロティノスのエネアスⅢ、一「運命について」で、その名こそ挙げていないが、プレトン説に与しない発言を行なっている。また、プレトンの先の著とこれを含む一写本 (Riccardiana MS. 76) を、フィチーノは所有していたが、これに注をつけ、人間の自由意志を弁護している。また、プレトンの『法律』(ノモイ) に窺われる多神教崇拝もフィチーノには無縁である[11]。

ただ、プラトン主義の伝統を「古代神学」(prisca theologia) の伝統と見なすフィチーノの歴史観には、プレトンに負うところがあるであろう。「古代神学」の鍵となる人物はフィチーノの場合、ヘルメス・トリスメギストスであった。これはやがて、アゴスティーノ・ステウコ Agostino Steuco の著名な『永遠の哲学』(*De perenni philosophia libri X*. De Eugubij nomine, Lugduni 1540. altera editio, Basileae, 1542) に結実する。彼は一四九七年か九八年にグッビオに生まれた。ラテン名は Steuchus Eugubinus だが、早い時期に洗礼名ガイドの名をアゴスティーノ、つまりアウグスティヌスに改めた。のちに、ローマ教皇パウルス三世にヴァティカン図書館を任された。トレント公会議に赴く途中、一五四八年にヴェネツィアで亡くなった。

ステウコはヘブライ語を理解し、カバラに通じていた。このことはその主著にも窺える。ヘルメス文書の引用も、神話的オルフェウスの名も目立つ。そのほか、プラトン、アリストテレスなどはもちろんだが、アレクサンドリアのフィロン、プロティノス、プロクロス、イアンブリコス、それにディオニュシオス・アレオパギテス等の名も頻出する。プレトンも結構現われ、プレトンが重視した古代神学者ゾロアスターも何度も出てくる。プルタルコスやキケロの名は言うまでもない。哲学各派を教えるディオゲネス・ラエルティオスが紹介されたのも、このイタリア・ルネサンスであったが、やはり彼の名も多く引用されている。ただ、ポンポナッツィの名はまったく出てこない。このような豊穣な哲学史に通じながら、特にプラトン主義の伝統を踏まえて書かれた書物が、この『永遠の哲学』であった。フィチーノの名の引用は一度だけだが、「永遠の哲学」とは、フィチーノの「敬虔な哲学」(pia philosophia) としての「古代神学」にもっとも遡及すると考えていいであろう[12]。

(五) 結 ― アウグスティヌス主義の問題

ルネサンスのプラトン主義を見ていると、哲学と神学が分離し難いことが明らかになる。冒頭でマイエルの論を紹介しながら、カッシーラーの名を出したが、彼は『認識問題』第一巻を発展させた、ルネサンス哲学研究の古典『個と宇宙』(*Individuum und Kosmos in der Philosophie der Renaissance*, Berlin/Leipzig, 一九二七) のなかで、スコラ神学から哲学が自立していくことを近代思想の特色とした。そこでは、フィチーノが積極的に評価されず、却って「アリストテレス主義者」ポンポナッツィが注目されている感がある。カッシーラーの観点では、フィチーノの哲学思想は神学的傾向が強く、その分、近代的でないと判断されたのであろう。

フィチーノとステウコの思想から、神学と哲学双方の結合強化を図る上で、アウグスティヌスが鍵を握っている教父であることは明白である[13]。アウグスティヌスはまた、一五世紀プラトン哲学復興以前の歴史を考える上でも重要な人物である。一四世紀のペトラルカが、『わが秘密』(*Secretum*) でこのアウグスティヌスを対話の相手に選んだことは、イタリア・ルネサンスのプラトン主義開始の画期をなすものであった。この点で、ダンテにアウグスティヌスが欠如しているのは象徴的である。そして、ペトラルカの同時代人、グレゴリオ・ダ・リミニ Gregorio da Rimini は近世最初のアウグスティヌス主義者といえるのではないだろうか。ここには明確に、ビザンティンの伝統とは別の、教父を介した、中世来のラテン的伝統におけるプラトン主義の歴史がある。

ステウコ以後になると、イエズス会士ロベルト・ベッラルミーノ Roberto Bellarmino (一五四二―一六二一) が、その『教会の著作家』(*De scriptoribus ecclesiasticis*) のなかで、アウグスティヌスに大いに注目している[14]。イエズス会士の思惟・思考とアリストテレス哲学に基づくトマス神学との深い関連性はよく知られているけれども、プラトン主義の大事な一翼を成すアウグスティヌス主義がルネサンスにおいていかなる発展を遂げて、近代の新たな修道会などにどのように受け入れられたのかは、今後の課題として残されている。

【註】

(1) M. Meier, Gott und Geist bei Marsiglio (*sic*) Ficino, in *Beiträge zur Geschichte der Renaissance und Reformation*, München/Freising, 1917, 236-247.

(2) *Descartes und die Renaissance*, Münster i. Westf, 1914.

(3) A cura di Sylvain Matton, Scuola Normale Superiore di Pisa, 1986.

(4) 川村信三上智大学助教授のご教示による。

(5) *Decrees of the Ecumenical Councils*, Volume One *Nicaea I to Lateran V*, edited by Norman P. Tanner S.J., Sheed & Ward and Georgetown University Press, 1990, 360-361. ラテン語原文に英訳対訳となっている。

(6) *Ibid.*, 605.

(7) *Ibid.*

(8) Jos Decorte, Proofs of the Immortality and Mortality of the Soul in the Renaissance of the 12th and late 15th Centuries, in *Mediaeval Antiquity*, Leuvan University Press, 1995, 95-126, 特に 116-117. Cf., Paul F. Grendler, Paul Oskar Kristeller on Renaissance Universities, in *Kristeller Reconsidered. Essays on his Life and Scholarship*, edited by John Monfasani, New York, 2006, 89-130, 特に 111-118.

(9) *L'immortalità dell'anima nel Rinascimento*, Torino, 1963.

(10) Charles Lohr, Georgius Gemistus Pletho and Averroes. The Periodization of Latin Aristotelianism, in *Sapietiam*

amemus. Humanismus und Aristotelismus in der Renaissance, herausgegeben von Paul Richard Blum in Verbindung mit Constance Blackwell und Charles Lohr, München, 1999, 39-48.

(11) A. Keller, Two Byzantine Scholars and their Reception in Italy, in *Journal of the Warburg and Courtauld Institute*, XX(1957), 363-370, 特に 365. John Monfasani, Platonic Paganism in the Fifteenth Century, in *Reconsidering the Renaissance. Papers from the Twenty-First Annual Conference*, edited by Mario A. Di Cesare, New York, 1992, 45-61.

(12) Mariano Crociata, *Umanesimo e teologia in Agostino Steuco. Neoplatonismo e teologia della creazione nel «de perenni philosophia»*, Roma, 1987, 48. 引用の頻度は、*Ibid.*, 233-239.

(13) *Ibid.*, 51

(14) William J. Bouwsma, The Two Faces of Humanism: Stoicism and Augustinianism in Renaissance Thought, in *A Usable Past. Essays in European Cultural History*, Los Angeles/Oxford, 1990, 19-73, 特に 62.

【シンポジウム】

ジョヴァンニ・ピーコ・デッラ・ミランドラのプラトン主義

――「自然と人間」という観点から――

大貫　義久

はじめに

小論では、「自然と人間」という観点から、特に『人間の尊厳について の演説 *Oratio de hominis dignitate*』(一四八六年。以下『演説』と略す)を中心にジョヴァンニ・ピーコ・デッラ・ミランドラのプラトン主義を明らかにしたい。彼には他にも『ジロラモ・ベニヴィエーニによって作成された〈愛の歌〉注解 *Commento sopra una canzona de amore composta da Girolamo Benivieni*』(一四八六年、『演説』の直前に執筆)、『ヘプタプルス――「創世記」の六日についての七部からなる話――*Heptaplus*』(一四八八―八九年)、『存在と一者について *De ente et uno*』(一四九一年)といった著作があり、これら三著作間でのピーコの主張の相違がこれまで議論されてきた[1]。また、ピーコはプラトン主義ばかりでなく、当時のアリストテレス主義や、さらにヘブライの神秘主義カバラなど様々な思想の影響を受けているので、彼のプラトン主義だけを浮き彫りにするのは難しい。ピーコのプラトン主義はキリスト教的なプラトン主義と言ってよいかもしれない。そして当時のプラトン主義を定義すること自体がそもそも難しい。

プラトンの影響ということでは一四八四～八八年にフィチーノによる『プラトン全集』のラテン訳が刊行されたことは注目に値する。またフィチーノのプラトン理解はビザンツのギリシア学者ゲオルギオス・ゲミストス・プレトンの影響を受けている。プレトンはプラトンを、ヘルメス・トリスメギストス、ゾロアスター、オルフェイス、ピュタゴラスと続く「古代神学 theologia prisca」の大成者とみなしていた。この古代神学の考えに従い、フィチーノはプラトンの著作をラテン訳する前に『ヘルメス文書』を翻訳したのである。ピーコもプラトンへの関心をフィチーノによって開かれたが、しかし彼にはフィチーノのようなプラトンへの熱狂はない。

以上のことを考慮に入れた上で、小論では、ピーコが独自色をあえて出そうとした、そしてまたルネサンス期において特に有名な『演説』に注目し、「自然と人間」について考え方を扱う中でピーコのプラトン主義を明らかにしたい。『演説』において ピーコは、「人間の尊厳」はもちろんのこと、さらには、それ以上に人間の尊厳を実現する学問(哲学)の、特に自然哲学の、効

新プラトン主義研究

STUDIA NEOPLATONICA

第7号

講演会

音楽という名の学知
——バッハの曲集 „Das Wohltemperirte Clavier" へのメモ——
……丸山　桂介　1

シンポジウム「新プラトン主義とルネサンス思想」

ジョルダーノ・ブルーノにおける新プラトン主義
——『英雄的狂気』の場合——……加藤　守通　19

イタリア・ルネサンスにおけるプラトン哲学とキリスト教神学
……根占　献一　31

ジョヴァンニ・ピーコ・デッラ・ミランドラのプラトン主義
——「自然と人間」という観点から——……大貫　義久　39

合評会

柴田有『教父ユスティノス——キリスト教哲学の源流——』勁草書房
……（司会）大森　正樹、（自著紹介）柴田　有　51
（評者）鈴木　順、（評者）柳澤　田実

プロティノス・コロキウム

プロティノスにおける異他性の生成……今　義博　69

論文

トマス・テイラーにおけるプロティノス受容に関して
——フィチーノを介して——……三宅　浩　79

初期リルケと新プラトン主義との出会い並びにその展開
——創造と芸術の視点をめぐって——……水落　美也子　91

アウグスティヌスの探求における新プラトン哲学の影響について
——『告白録』・『神国論』・『三位一体論』に基づいての一考察——
……堺　正憲　115

欧文要約……(1)

2007
新プラトン主義協会

新プラトン主義研究　第7号　STUDIA NEOPLATONICA　Vol. VII　2007

STUDIA NEOPLATONICA

SHIN-PLATON-SHUGI KENKYU

Vol. VII　December 2007

CONTENTS

Lecture

Musica scientia mathematica:
Im Fall des Wohltemperierten Klaviers bei Bach····Keisuke MARUYAMA 1

Symposium "Neoplatonism and Renaissance Philosophy"

Giordano Bruno and Neoplatonism:
With Special Reference to the *Eroici Furori*·····Morimichi KATO 19

The Platonic Philosophy and the Christian Theology
in the Italian Renaissance·····Ken'ichi NEJIME 31

Platonism of Giovanni Pico della Mirandola:
From the viewpoint of "Nature and Man"·····Yoshihisa OHNUKI 39

Review

You SHIBATA, *Justin, Philosopher, and Martyr:*
A Source of Christian Metaphysics·····(Chairperson) Masaki OHMORI 51
(Author) You SHIBATA 53
(Reviewer) Jun SUZUKI 57
(Reviewer) Tami YANAGISAWA 61

Plotinus Colloquium

The Genesis of 'Otherness' in Plotinus·····Yoshihiro KON 69

Articles

A Study on the reception of Plotinus by Tomas Taylor:
Through Ficino·····Hiroshi MIYAKE 79

Rilkes Begegnung mit Neuplatonismus und ihre Entfaltung:
Um seine Ansichtspunkte über Kunst und seine eigene schöpferische Tätigkeit
·····Miyako MIZUOCHI 91

On the Influence of Neoplatonism on Augustine's Inquiry:
A Consideration according to *Confessiones*, *De Civitate Dei*, and *De Trinitate*
·····Masanori SAKAI 115

Summaries·····(1)

JAPANESE SOCIETY FOR NEOPLATONIC STUDIES
Nagoya Institute of Technology
Nagoya, Japan

ISSN 1348-3889

定価：本体1,000円（税別）